

※ ホームページ等で公表します。(様式 1)

立教 S F R - 院 生 - 報 告

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院学生研究**  
**2015年度研究成果報告書**

研究科名	立教大学大学院 文学研究科 フランス文学専攻		
研究代表者 (2016年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・フランス文学専攻・後期課程6年	黒木 秀房 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	澤田 直 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	ジル・ドゥルーズの哲学と芸術		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2016年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・フランス文学専攻・後期課程6年	黒木秀房	
研究期間	2015 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円		

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、20世紀フランスを代表する哲学者ジル・ドゥルーズにおけるフィクションの問題を扱った。2015年にドゥルーズ没後20年が経ち、徐々にそのコーパスの全貌が明らかになる中で、ドゥルーズ研究は総体的なドゥルーズのイメージを提示する包括的な研究がひとまず出揃った状況にある、と言える。ドゥルーズ独自の概念に関する従来の内在的研究をさらう一段階深化させるためには、他の哲学者、他の領域にもまたがる外在的な視線を介在させるようなテーマ研究も必要不可欠であるように思われる。そこで今回は、新たな研究への架け橋となるような準備段階として、コーパスの整備も行いつつ、フィクションの問題にテーマを絞りながら、ドゥルーズにおける概念創造のプロセスについて研究を行った。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ ドゥルーズ ] [ フィクション ] [ 概念 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の成果は大きく分けて二点挙げることができる。まず第一に、哲学者ドゥルーズのコーパスの整備である。フィクションの問題の射程はきわめて広範に及ぶので、ドゥルーズの方法的概念である「ドラマ化」に焦点を絞りながら具体的に分析した。以下、順次説明する。

**(1) コーパスの整備**

2015 年に没後 20 周年を迎えたドゥルーズは、書簡集 (Gilles Deleuze, *Lettres et Autres textes*, éd. David Lapoujade, Minuit, 2015) が出版されるなど徐々にそのコーパスの全貌が明らかになってきている。これまで主要著作について断片的な言及が行われることにとどまっていたが、あまり言及されることのなかったテキストにも目配せをすることで、ドゥルーズの別の側面を見出すことができるように思われる。今後、より本格的な研究が進むことが予測されるドゥルーズ研究のためには、コーパスの整備が必要不可欠であるように思われたので、まずは個人的なデータベースの構築を試みた。具体的には、フランス国立図書館やソルショア図書館に赴いて調査することで、これまでの論集や書簡集には再掲されていない論文や書評を閲覧することができた。また、すでに論集に再掲されている論文の中でも、再掲される際に削除されたイメージなどについても見るすることができたことは、ドゥルーズにおける言葉とイメージの問題を考察するうえで重要であった。今後の研究につながる大きな鉱脈を発見することができたと言える。今後は、視聴覚媒体を含めたより完成度の高いコーパスを作るとともに、このコーパスを活かしてこれまでにあまり注目されることのなかったドゥルーズの側面を明らかにすることも目標としたい。

**(2) ドゥルーズ哲学におけるフィクションの問題**

フィクションの問題は哲学の根本に関わる重要な問題である。というのも、フィクションということで問題になるのは真偽の問題であるからである。一般的に哲学者は真理を扱うものとされ、言語の論理的な使用によってこれを解明することが哲学者の使命であるとされてきた。その帰結として、フィクションは偽なるものとして扱われ、真理に対する副次的なものというイメージがあった。唯一の絶対的な価値としての真理から真理の創造という真理観の大きな変更を哲学に迫ったのはニーチェであるのだが、ドゥルーズもまたこのニーチェを引き継ぐかたちで「偽なるものの力」を肯定した。ならば、ドゥルーズの著作の中にフィクション論というかたちでは残されていないにせよ、これまで副次的に扱われていたフィクションの問題を、ドゥルーズ哲学のうちにすることは決して的外なことではなからう。むしろ、概念創造を哲学の営為として規定するドゥルーズの創造のプロセスを明らかにするためには、フィクションの問題をドゥルーズ哲学のうちに積極的に見出していく必要があるのではないだろうか。本研究の出発点はまさにここにあった。

しかしながら、「フィクション」という言葉に注目しながらドゥルーズ哲学を俯瞰してみるならば、フィクションに対して両義的なドゥルーズの態度を見出すことができた。真理というモデルに裏打ちされる限りでのフィクションに対しては、当然ドゥルーズは否定的な態度を示すのだが、その一方でスタイルの問題としてのフィクションに関しては肯定的な態度をとるところか、哲学にフィクションの問題が外せないことを明示していたのであった。

そこで本研究においては、「フィクション」に近接する「ドラマ化」という概念を中心に分析を行った。これまであまり注目されることのなかったこの概念は、実はドゥルーズの概念創造のプロセスを語る上で重要な位置を占める方法的概念であった。その結果、論理的な言語使用によって形成されと考えられがちな概念は、ドゥルーズにおいては、フィクション化ないしはイメージ化によって生成されることが示された。

こうした研究の成果の一部は、「ドゥルーズとフィクションー「ドラマ化」から「仮構作用」へー」(日本フランス語フランス文学会 2015 年度春季大会、明治学院大学、2015 年 5 月 30 日)として口頭発表を行った。また、さらにその一部を大幅に加筆修正を加えて上で、「ドゥルーズと「フィクション」の問題ー「ドラマ化」を中心に」(『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、N°108、2016 年、209-223 頁)として発表した。

## 研究成果の概要 つづき

### (3) その他

以上の研究成果に加え、そのほかに間接的な成果として、次のものが挙げられる。

- ・ブライアン・マッスミ「非人間的転回」『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、161-171 頁)
- ・(主要著作ガイド) ジル・ドゥルーズ『ニーチェと哲学』(『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、204-205 頁)
- (主要著作ガイド) ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』(『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、208-209 頁)

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

**① 雑誌論文**

黒木秀房「ドゥルーズと「フィクション」の問題ー「ドラマ化」を中心に」(『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、N°108、2016 年、209-223 頁)

**② 翻訳**

ブライアン・マッスミ「非人間的転回」(『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、161-171 頁)

**② その他**

(主要著作ガイド) ジル・ドゥルーズ『ニーチェと哲学』(『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、204-205 頁)

(主要著作ガイド) ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』(『ドゥルーズ-没後 20 年 新たなる転回』、河出書房新社、2015 年、208-209 頁)

**④ 口頭発表**

「ドゥルーズとフィクションー「ドラマ化」から「仮構作用」へー」  
(日本フランス語フランス文学会 2015 年度春季全国大会、明治学院大学、2015 年 5 月 30 日)